

茶の湯文化学会会報 No.90

第90号 / 2016年9月29日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

台湾三回目の旅行は、南部の茶産地巡見と茶人との交流、新設の故宮博物館南院の見学などが中心である。メンバーは熊倉会長はじめ総勢二〇名。六月三十日から七月四日まで、四泊五日の爽り多い旅行であった。

第一日（六月三〇日）高雄市内

高雄は台湾南部の港湾都市。上空からも開発の様子が取れる。やっぱり暑い。ここは、すでに北回歸線の南側、つまり熱帯に属するのだから、当然ではある。初日はホテル入り後に中華料理を堪能。刺身など日本人向けのメニューでも、エビの背ワタが抜いてないなど、あと一歩というところか。夜は有名な六合夜市を散策。海辺のまちだけにイカや貝類など豊かな食材が見られた。

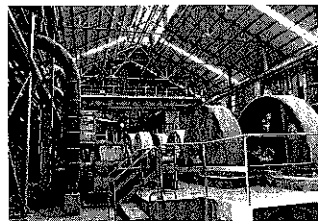


露店のイカ売り

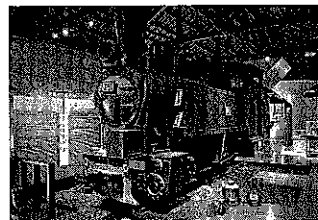
第二日（七月一日）高雄市内から台南市

まずは操業停止後に博物館として公開されている製糖工場跡見学。台湾の製糖業発展には新渡戸稲造の貢献が大きい。日本人工場長の住宅や観音像、あるいは

防空壕跡などとともに原料運搬用の蒸気機関車が保存されている。工場の規模には圧倒されるが、逆にこれをそっくり保全し後世に伝えるためには、巨費が必要になる。他人事ながら心配である。



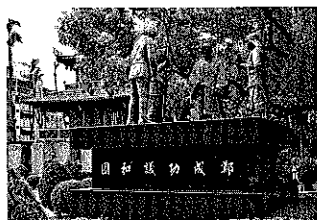
製糖工場の内部



保存されているSL

午後は、かつてオランダ

が拠点としたゼーランドイア城の跡に建てられた、中国風の赤嵌楼を見学。建物の土台に当たる部分にオランダ時代のレンガ造りの城壁の名残が見え、敷地内には日本人との混血、鄭成功



赤嵌楼前の鄭成功像

第三十九回研究会報告・台南研修記 中村羊一郎

とその仲間の像がある。明国再興を願いオランダと争った台湾の英雄であるが、日本では近松の「国性爺合戦」で有名。なかでも竹林から現われた虎を少年国性爺が見事おさえるという虎舞が岩手県から四国にまで分布している。

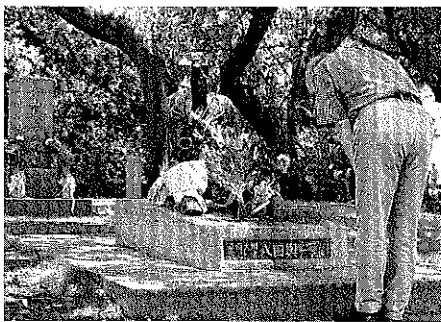
ついで台南市郊外の東山郷聖賢村頂窩の茶問屋を訪問、台湾伝統茶文化産業発展協会の黄光裕さんらの歓迎を受けた。「歓迎大日本各地茶の湯文化学会」の横断幕のもと、伝統楽器の歓迎演奏。こういう場面に不可欠なのが、歓迎の意を表する揮毫である。「酒好多飲可延年、茶要細品方有味」を始め次々と書いてくれる。ついで多種のお茶の試飲、販売と続く。ここでは製品を集めて出荷している。工場内では多段式の乾燥機のほか、いわゆるバスケも使われている。竹製の鼓形の籠の中で炭火をおこし、その上にかけて帽子型の籠の上で出荷前の乾燥を行なう。すでに十九世紀のウーロン茶製造に使用されていた道具で、日本にも明治期に入って



歓迎の揮毫

きた。九州では釜炒り茶の製造に使用され、カゴベロ（籠焙炉）と呼ばれている。台南市泊まり。

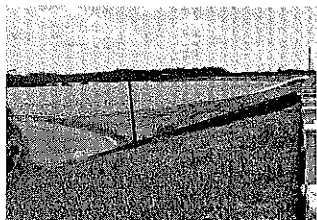
第三日（七月二日）台南市から嘉義市植民地としての台湾発展に寄与した官僚や技術者は多いが、とくに烏山頭ダムうざんとくの建設を推進した土木技師、八田與一は格別。台南市内から車で三十分足らず、公称一億四千万トンの水を湛える水庫（ダム）は、複雑に屈曲した碧い湖面近くまで木々がしげり、その美しさから珊瑚潭ともよばれる。



八田與一像に献花する熊倉会長

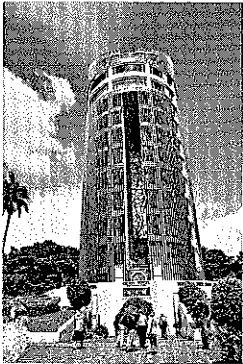
台湾の南部に広がる嘉南平野はかつては水に恵まれない貧しい農村地帯であった。八田は、常識を超える巨大ダムと水利網建設を企画し、昭和五（一九三〇）年に完成させた。当時、五千四百万円にのぼった工事費は政府と受益者である農民が半分ず

つ負担した。この水を最大限に利用するため、一年目は水稲、二年目は甘藷、三年目は給水無しで雑穀を作るといふ、三年単位の輪作が行われる。ダムと水利は農



ダムの堰堤

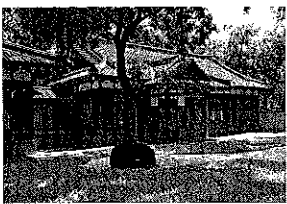
民たちが結成した組合が管理しており、前組合長の徐金錫さんが八田の業績を熱く語ってくれた。目下、ダムをユネスコ世界文化遺産に登録申請しようという運動をしているという。八田と技術者たちが暮らした日本家屋が八田の郷里、金沢の職人の協力を得て復元されている。



射日塔

台南市から北上、嘉義市内には旧嘉義神社の社務所が貴重な和風建築として保全されている。ここはかつては台湾先住民の祭祀の場であったそうで、嘉義神社本殿跡地には、芸

術センターと展望台を兼ねた高さ六十二メートルある射日塔という近代的なビルが建っている。「射日」は、こんな神話に基づいている。



旧嘉義神社社務所



射日塔での呈茶会

むかし、天空には太陽が二つあった。そのため昼夜の区分はなく、人びとは大いに苦しんだ。そこで三人の勇士が太陽の一つを射落とすために旅に出た。長年の旅の果てに三人は死んでしまったが、息子たちが親の遺志を継ぎ、とうとう大きい方の太陽を弓矢で射落とすことができた。その結果、落とされた太陽は月となり、世の中に昼夜の区分ができた。

射日塔の最上階で、林翠華さんを始め嘉義の茶人の方々が待っていてくれた。いくつかのテーブルに分かれて阿里山の高山烏龍茶と同紅茶を淹れて頂き、豊かな香りと水色を味わった。茶器を載せた象牙色の盆の上に青と赤の小さな蝶が二匹、さりげなく置いてある。季節感を出すためだという。うれしい心遣い

だ。日本側からは抹茶のお点前を披露した。台湾の方々の食い入るようなまなざしに、日本文化への関心の高さがうかがわれる。

ホテルに向かう途中、「檜意森活村」に立ち寄った。嘉義はヒノキなど木材の産出で知られ、多くの日本人が住んでいた。戦後、彼らの宿舎だった二十八棟の和風木造家屋が荒れ果てていたのを、嘉義市が整備し、外観はそのままに食堂や土産物売り場に転用されている。ここで昨年公開の台湾映画「KANO 1931 海の向こうの甲子園」のロケも行われた。KANO（嘉農＝嘉義農林学校）の野球部が甲子園準優勝を勝ち取ったという実話である。嘉義の駅前ロータリーに建てられた金色のピッチャー像の台座には「棒球源郷在嘉義」と書かれている。嘉義市泊まり。

第四日（七月三日）阿里山

台湾でもっとも美味しいお茶とされる阿里山高山茶。ほのかな甘み、独特の香りが愛好家を魅了し、偽物が出回るほど人気がある。高山茶を名乗るには標高千メートル以上の高所で作られることが必要。阿里山高山茶を作っている羅志松さんが住む太和という集落の標高は千三百メートルもある。周囲の斜面は一面の茶畑、手摘みをしている姿もあった。遠くに台湾の

最高峰、三九五二メートルの玉山の頂が見える。



阿里山の茶畑



阿里山の茶畑



茶摘み風景

台湾の茶産業の歴史は古くない。もともと大陸からやってきた清国人が茶を持ち込んだらしく、日本時代以前からそこそこの生産があったようだが、日本統治が始まると砂糖、バナナ、樟脳（楠から製造）などとともに台湾の重要産業に位置付けられて発展した。そのなかで阿里山茶の歴史はさらに新しい。一九八〇年代、地元民が栽培と製茶技術を学び、高山の地理的特徴を生かした高級茶を生み出した。

茶工場庭先の覆いの下で摘んだばかりの茶葉をしばらく広げてから、二一度に保たれた室内できつかり二、七五〇グラムずつ浅いザルに移して棚に並べる。この萎凋という工程で独特の香りが形成される。ザルは径一拵ほどの竹製だが、ここではガランと呼ぶ。台湾は漢字の国、こういう字を書くのかと質問したら、お茶に詳しい中国語通訳も「わかりません。ガランは台湾語です」という。では、かつてひとくりに高砂族といわれ、現在はタイヤル族など一六部族が公認されている先住民の言葉なのだろうか。いや、そうではない。古くに大陸南部から移住してきた人々の言葉が日常語として変化し、それに日本語の単語も混じったもので、表記するには漢字とアルファベットを混ぜるしかないそうだ。なお帰国後、蔡英文



室内萎凋

總統は、現在五十五万人いる先住民に対し、過去四百年にわたる不当な差別を謝罪し、自治や言語保護のための法案を制定するというニュースを聞いた。

旅の最後は昨年開館したばかりの故宮南院。台北の故宮博物院の分院で、展示テーマの一つが日中の茶文化である。ここで日中とは、台湾・中国・日本を意味する。茶文化の交流というのはいささしいが、さまざまな角度からの関心も必要とされている。率直な感想である。嘉義市に連泊。



故宮南院

最終日は新幹線で台北、桃園空港へ。日本の新幹線の色変わりという感じ。午後八時前に無事成田空港帰着、解散。

平成二十八年年度
総会・大会報告

平成二十八年年度総会は六月十一日(土)午後一時半から、大会と同じ名古屋文化短期大学で行われた。

の湯」が無形文化遺産として認定されるよう、ワーキング・グループ(座長中村利則副会長)を立ち上げて実現の方策を検討して行動に移していくことが確認された。以上の提案は拍手をもって承認され、総会は午後二時に終了した。

なお詳細については会報No.九〇掲載の平成二十八年年度第一回理事会報告を参照されたい。

【大会】

平成二十八年年度大会は、六月十一日(土)名古屋文化短期大学において二二九名の参加を得て行われた。

十時三十分、全体司会神谷昇司理事の紹介による熊倉功夫会長の開会挨拶で大会が始まった。研究発表は中村修也理事の司会で四題行われた。一題目は、沢村信一氏の「粒度と食感からみた抹茶のおいしさ」、二題目は田鶴寿弥子氏の「茶室における樹種選択」、三題目は吉野亜湖氏の「近代の海外向け日本茶広告の中の茶道」、昼食と総会の後、四題目は宮内壽美氏の「現代における稽古活動の役割についての一考察―二つの事例報告をもとに―」であった。

休憩をはさみ、竹内順一副会長の司会によ

り「茶道具研究の最前線」というテーマでシンポジウムが行われた。まず、原田一敏氏が「茶の湯釜の研究 どこまでわかったか―成果と課題―」と題して基調講演を行い、染色の分野から小笠原小枝氏の「名物裂にみる遠・元染色文様の面影」、漆工の分野から小池富雄氏の「永楽の堆朱と茶の湯における唐物漆器受容」、陶磁の分野から神崎かず子氏の「陶産地(瀬戸・美濃)からの研究報告」の発表があった。最後に並んで登壇した四人の発表者に対して、会場から次々と質問や感想が寄せられ、活発な質疑応答となった。

午後五時五十分、中村利則副会長による閉会挨拶があり、閉会となった。

今大会は、シンポジウムのみならず午前からの研究発表も含めて、最新のアプローチ方法による知見の報告が多かったように思われる。従来の根拠の不確かな言説を、科学的な手法により検証し、研究を新たな方向に発展させる、それが幅広い分野で行われていることが実感できるものであった。中村副会長の発言にもあったように、当日参加できなかった会員のためにも、論文として会誌に発表されることが期待される。

なお、翌十二日(日)には、昭和美術館で

総会に先立って、議長に佐藤豊三理事、副議長に船阪富美子理事が選出された。

初めに平成二十七年年度の学会活動について田中秀隆副会長より報告があった。事業報告については、理事会(四月二十六日・九月二十三日・二月十四日の三回)、大会(六月七日、東洋英和女学院大学・大学院にて研究発表会ならびにシンポジウム「明治東京の茶の湯の黎明」、研究会(第三十八回研究会は、五月二十七日〜三十一日、台湾の茶産地訪問・東方美人茶の茶園訪問・茶業改良場魚池分場の視察ほか)、例会(各地二回〜六回)、会報(No.八十五〜No.八十八)、学会誌(平成二十七年年度版『茶の湯文化学』第二十四号・第二十五号)など、各活動実績が報告された。

引き続き、田中副会長より平成二十八年年度の事業案と予算案が提案された。事業案としては、総会・大会(六月十一日、名古屋文化短期大学・昭和美術館において研究発表・総会・シンポジウム・交流茶会を開催)、研究会(第三十九回研究会、六月三十日〜七月四日、台湾の茶園見学・茶文化交流)、例会(各地二回〜六回)、会報(No.八十九〜No.九十二)、学会誌(平成二十八年年度版『茶の湯文化学』第二十六号・第二十七号)、また「茶

茶室見学と茶会が催され、百二十四名という多数の方が参加された。これの詳しい内容は、次号であらためて紹介される予定である。

理事會

平成二十八年年度第一回理事会が、六月十一日(土)午後十二時四十分より名古屋文化短期大学において行われた。理事十五名、幹事九名の二十四名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、総会に提出する議案について
 - ・平成二十七年事業報告、決算報告
 - ・平成二十八年事業案、予算案
 - ・今後の活動方針に関する提案
- 二、茶会について
- 三、会誌・会報について
- 四、その他

第一議題では、資料が配布され、平成二十七年事業報告ならびに事業案の説明がなされた。また、平成二十七年年度決算報告ならびに平成二十八年年度予算案については、前年度までの項目を変更し作成した旨、説明が

行われ、承認された。

今後の活動方針に関する提案において、海外研修について、中村修也理事より、理事の参加が少ないので、もっと参加して欲しいとの要望が出された。また、各地例会については、近畿例会では、なかなか発表者が見つからないので、年六回の開催は厳しいとの意見が出された。金沢例会では、今後出張例会をしたとの声が会員の中よりあり、熊倉功夫会長の案内で、MIHO MUSEUMを訪れてはどうか、との提案がなされた。

第二議題では、六月十二日(日)十時より昭和美術館の南山寿荘において、茶会・見学会が、神谷昇司理事を中心に、一三五名の参加者で行われる報告がなされた。

第三議題では、会誌について中村利則理事より、論文等厳しい判断により、なかなか掲載に至らず、かなり内容の薄いものとなってしまっている。資料翻刻等を増やして行く向きを考えていきたい。会報について船阪富美子理事より、今後例会発表概要の投稿をこれまで以上にお願したい。会報用例会の発表概要は六〇〇字だが、東京例会の発表概要は六〇〇字と一五〇〇字の両方を出してもらって、その都度使い分けている。各地例会にお

いても、両方出してもらってはどうかとの提案が成されたが、その都度臨機応変に対応していくしかないだろうとなった。また、空きスペースを、編集委員の「まめ知識」コーナーで、埋める提案がなされた承された。

例 会

東京例会

(平成二十八年七月十六日)

「茶経」における茶の異名について

高橋 忠彦

陸羽の「茶経」は、「茶」「檜」「設」「茗」「薺」という茶の異名五種を挙げる。しかし、唐代以降の文献でも、「茶経」七之事でも、実は「茶」と「茗」が多く、「薺」が少なく、「檜」と「設」はまず使用されない。「茶」は、「詩経」で古い野菜を意味する「荼」に淵源する。秦漢帝国が成立し、茶が四川文化とともに中原に流入した結果、「茶」を用いて、苦い植物である茶を表すこととなった。漢代以降、「苦茶」という語も現れ、「茶」は定着した。同時に、四川の古い方言の「薺」も普及し、「茶

薺」なる連語も形成された。この「薺」は、漢から西晉にかけて、「四川から普及した高級茶」のイメージで使われた。しかし、東晉の時、四川が北方民族の政權に支配されて以降、「薺」の用例は激減する。他方、三国呉から使用された「茗」は、「江南の民間の茶」を指し、伝統的な「茶」と対立しつつ、南朝で使用が定着していく。北朝側が南の茶を軽侮する場合、「茗」の語を使うのも故のあることである。その後、唐では、「茶」と「茗」が支配的になった。なお、「檜」は、『爾雅』に見えるが、用例のない幽霊語であり、「設」は、「薺」と発音が近いので、その異形と推測される。

「豊臣秀吉の茶の湯の本質」

中村 修也

茶の湯研究のなかで、「〇〇の茶の湯は△△」という表現に出くわすことがある。たとえば、「千利休の茶の湯はわびである」とか「小堀遠州の茶の湯はきれいさびである」というものである。しかし、ある個人の茶の湯の本質を第三者が知ることができようか。それも戦国時代であれば、四〇〇年以上前の過去の人物の文化活動の本質を知ることが

できるであろうかという疑問にぶつかる。

そもそも茶の湯研究の方法論が存在するかという問題がある。千利休研究では、かつては『南方録』が描くところの利休の茶の湯を史実とみなしてきた。それゆえ、非常に単純な利休の茶の湯像が構築された。だがそれは利休の茶の湯の実像ではなく、あくまで立花実山が創作した理想像としての利休の茶の湯であった。『南方録』に限らず、近世の茶書に描かれた茶人像・茶の湯像は、あくまで茶書筆者の描く理想像であり、実態との関連性は証明できない。

比較的、実証性のある方法論としては、茶会記の分析がある。茶会に同席する客組、使用された茶道具などを分析する方法である。信憑性の高い茶会記の分析には意味がある。しかし、時代的な環境を考えると、同伴者は一般的には近隣の交友関係者であるという傾向があるし、茶道具にしても必ずしも亭主の好みが反映しているとは限らない。なぜなら天王寺屋のように数世代に渡る堺の豪商であれば、伝世の道具があり、それを拝見所望する客がいる以上、本人の好み云々に関わらず、伝世の名物道具が茶会に出されるからである。

逆に、自分の欲する趣味の道具があっても、それを購入する経済力がなければ、それを茶会で使用することはできない。つまり、茶会記に記録された茶会の道具が、亭主の好みの道具かどうかは簡単には断定できないということである。また、道具の使用例は、個人的な嗜好性だけではなく、時代の流行も意識しなければならない。

茶会記分析の限界を認知したうえで、現在は、茶会記の分析という方法論以外に、有効な方法論を見いだせていないのが現状である。茶の湯研究が、茶会記や茶書に偏っているという問題がある。個人の茶の湯の特性を知るとき、まずはその個人について知るべき必要がある。秀吉ならば、彼がどのような人物で、どのような感性を持っていたかを知り、そのうえでその茶の湯が彼の人生にいかなる価値を有していたかを論じる必要がある。

秀吉の茶の湯については、北野大茶湯を始めとする大茶会に注目が集められていた。しかし、イベント茶はあくまで公的な行事であって、秀吉個人の茶の湯ではない。言い換えると、イベント茶会からは秀吉のパーソナルな側面は知り得ないということである。そして、より秀吉の茶の湯の本質に近いのがど

ちらかといえ、パーソナルな茶の湯に軍配を上げるべきである。

こうした時、我々は秀吉が大坂城や名護屋城に設けた茶室空間を思い浮かべなければならぬ。秀吉は小間の茶室を好み、それを「山里」と称した。それは『山上宗二記』にも、「当関白様の御代十ヶ年の内、上下悉く三帖敷、二帖半敷、二帖敷これを用う」と記されたとおりである。また、天下人となる以前から、天正四年二月二十六日付「野瀬太郎左衛門尉宛書状」に茶園を修理すべきことを具申したなかで「茶一段能様三可申付候」と茶の出来具合を心配する秀吉の心情や、天正九年五月十七日付「今井宗久宛自筆書状」のなかで、「殊更切々御茶湯道具共拜見、心静二申承候段、本望至極候」と道具を拝見させてくれた今井宗久に礼を述べている様子などは、まさに秀吉が根っからの茶の湯好きであったことを示す史料である。こうした史料と茶会記録を合わせて総合的に検証して、はじめて秀吉の茶の湯の一端が理解できるものと考えられる。

例会のご案内

東京例会

平成二十八年十一月十九日(土) 午後二時

(会場: 日本大学芸術学部 江古田校舎)

「渡辺驥と明治初頭の東京の茶について」

依田 徹

「榮西の将来したもの」

岩間眞知子

平成二十九年一月二十一日(土) 午後二時

(会場: 東洋英和女学院大学大学院 六本木校舎)

「文人茶の語源について」

張 茹 涵

「松平不味造営の大崎苑の復元」

関口 敦仁

静岡例会

平成二十八年十月一日(土) 午後二時

(会場: 袋井市立南公民館)

「茶の文化を考える」

「茶産業との結びつき」 大森 正司

午後一時 〓 お茶の試飲会・書籍販売

午後二時 〓 講演・質疑応答

主催: 袋井市茶文化促進会・茶学の会

茶の湯文化学会

参加費: 会員三百円 一般五百円

東海例会

平成二十八年十月八日(土) 午後二時

(会場: 名古屋文化短期大学)

「近代茶道と田中仙樵」

田中 秀隆

近畿例会

平成二十八年十一月(未定)

(内容が決まり次第、学会ホームページにてお知らせします。)

北陸例会

平成二十八年十月八日(土) 午後二時

(会場: 越前陶芸村)

「(仮称)越前古窯拠点施設の茶室(建設中) および『茶苑』の見学」

吉江 勝郎

集合場所: 越前陶芸館 玄関前

参加費: 会員千円 一般千五百円

金沢例会

平成二十八年十一月十三日(日) 午前八時

(場所: MIHOMUSEUM)

「(仮)尾形乾山について」

熊倉 功夫

集合場所: JR金沢駅西口

(JR福井駅乗車可・現地集合可)

昼食: PEACHVALLEY

(MIHOMUSEUM内レストラン)

申込締切: 十月十五日(土)

(詳しくはお問合せ下さい)

お問合せ先: 076-298-2522

090-3762-0470

お知らせ

【新刊紹介】

* 『花道の思想』

井上 治著

思文閣出版 定価千八百円(税別)

* 『極 茶の湯釜』

監修原田一敏

企画・編集MIHOMUSEUM

淡交社 定価二千三百十五円(税別)

* 『天目茶碗と日中茶文化研究』

岩田澄子著

宮帯出版社 定価六千八百円(税別)

※年会費未納の方は、同封しました払い込み用紙にて、至急お払い込みください。よろしくお願いたします。